

## 近世期日本とタイで描かれた鳥 ——仏法が目指す「悟り」へ導く道具

Jariyanusorn Jet\*

本論文は、江戸中期、絵師伊藤若冲(享保元〔1716〕年～寛政12〔1800〕年)の「動植綵絵」及び、ラマ3世期(仏暦2367〔1824〕年～2394〔1851〕年)、タイ首都バンコクにあるクルアワン・ワラビハラ寺の壁に描かれた「ニバタ・ジャータカ」<sup>1</sup>の両作品に登場する孔雀、鶏、鸚哥、鳩を分析し、それぞれの意義を比較する。鳥の姿(身体の色)、環境(植物、風景)、絵画様式(花鳥画、物語画)を元に、仏教から受けた意味を解明する。

分析結果として、両作品で描かれた4種類の鳥は最重要の仏法である「悟り」に導く道具とされている点に共通点がある。また、悟りを得る段階では「動植綵絵」の鳥は鳥である存在を代表しているが、「ニバタ・ジャータカ」の鳥は仏陀を代表している、という相違点がある。このように、当時の仏教社会において、日本では鳥が人間との平等な関係性を持つが、タイでは鳥がより上位に位置づけられていると言える。

キーワード：近世期の花鳥画、「動植綵絵」、「ニバタ・ジャータカ」

### はじめに

鳥は古くから絵画と文学に頻繁に登場するモチーフとされてきた。時代が変わるとともに、絵画及び文学に登場する鳥の種類も異なる。本論では江戸中期の、絵師、伊藤若冲(享保元〔1716〕年～寛政12〔1800〕年)の「動植綵絵」及び、ラマ3世期(仏暦2367〔1824〕年～2394〔1851〕年)、タイ首都バンコクにあるクルアワン・ワラビハラ寺<sup>2</sup>の「ニバタ・ジャータカ」に描かれた孔雀、鶏、鸚哥、鳩を分析する。

まず日本とタイの美術史と文学史に登場する、鳥というモチーフの概要を整理する。

日本では、飛鳥時代(7C末～8C初頭)、キトラ墳壁画に中国から伝わってき

\* ジャリヤヌソン・ジェット、埼玉大学大学院人文社会科学研究所博士後期課程

<sup>1</sup> 「ニバタ・ジャータカ」(Nibata Jataka, นิบาตชาดก)は、仏典の中に一群の聖典である文学の物語「ジャータカ」から描いた510点の壁画で、日本語では「本生話」「前世物語」などと呼ばれる。内容は、仏教の開祖である仏陀の前世における美德を得るエピソードを集めたもの。仏陀の前世物語の壁画である。作者は不明だが、数人の画家が作ったことが記された。Phra Amphon Buddasarn. *The Analytical Study of the Buddhist Philosophy and Buddhist Art from the Mural Paintings of Pali Jataka at Wat Kruewan-vahavihara*, Thammasart University, 2003, p.18.

<sup>2</sup> クルアワン・ワラビハラ寺(Wat Kruewan-waravihara, วัดเครือวัลย์วรวิหาร)は、チャクリー王朝期にラマ3世の主催で建てられた寺院。Prungsri Wanliphodom. *Literary Splendor from Nibata Jataka*, Thai Arts Department: Ministry of Culture, 2002, p.384.

た朱雀が描かれた<sup>3</sup>。平安時代(延暦13〔794〕年～文治元〔1185〕年)には、鳥が和歌に各季節の植物と合わせて多く登場し、季節感を表現し、また四季の絵といった屏風、襖、掛軸などに描かれ、貴族にとって馴染み深いモチーフとなった<sup>4</sup>。室町時代(延元元〔1336〕年～天正元〔1573〕年)になると、中国に留学した禅僧によって紹介された水墨画において「花鳥画」というジャンルが誕生した。桃山時代(元亀4〔1573〕年～慶長20〔1615〕年)には、武家が好んだ鷹が城内や住宅に置かれた屏風や襖に描かれた。さらに江戸時代(慶長20〔1615〕年～慶応4〔1868〕年)には、狩野派、土佐派、琳派といった絵画の流派が主流となるが、花鳥画がやがてこれらの流派から自立したジャンルとなった。そして庶民文化の拡大とともに生み出された花鳥木版画にも鳥が多く登場し、更に本草学は花鳥画に影響を与えたため、鳥の絵画はより写実的になった<sup>5</sup>。平安時代から和歌の中で詠まれた雲雀、鶉、雉、鷺、鶉といった鳥だけでなく、庶民の日常生活に登場する鶏、雀、鳩、燕も『百千鳥狂歌歌合』などに描かれるようになり、さらに孔雀、鸚鵡、鸚哥などの外来の鳥も、絵画に登場するようになった<sup>6</sup>。

日本の文学史でも、奈良時代(和銅3〔710〕年～延暦3〔784〕年)の古事記および日本書紀において、多数の鳥が神の使いとして登場した<sup>7</sup>。平安時代には、和歌の中で四季の情趣として鳥が花や木と合わせて詠まれた。鎌倉時代(12世紀末～1333年)から近世期(19世紀)までは、夫婦仲、親心といった人間の価値観を示す逸話などにおいて、鳥が表わされるようになった<sup>8</sup>。

タイでは、スコータイ王朝(仏暦1792〔1238〕年～2006〔1438〕年)、カオプラバタイ寺(Wat Khaopratayai、วัดเขาพระบาทใหญ่)に作られた仏足石の表面に、鵠のモチーフが描かれている。アユタヤ王朝(仏暦1893〔1351〕年～2310〔1767〕年)では、主な寺院の壁画や仏教の彩飾写本に描かれた仏陀の物語のなかで、鳥が自然環境の飾り物として登場する。特に、インド仏教から伝わってきた聖なる須弥山(Triphumi、ไตรภูมิ)の風景に鳥が描かれることが多い<sup>9</sup>。チャクリー王朝(仏暦2325〔1782〕年～2394〔1851〕年)には、首都だったアユタヤのように、新都心となったバンコクでも寺院が多く建設されたため、寺院内の壁画に前時代より多くの鳥が描かれるようになり、仏陀の物語の絵画に鳥が表現され

<sup>3</sup> 橋本敬造著「飛鳥天文図管見:キトラ古墳星図の意味について」、関西大学博物館紀要巻5、1999年、7頁。

<sup>4</sup> ハルオ・シラネ著『四季の創造 日本文化と自然観の系譜』、角川選書、2020年、47頁。

<sup>5</sup> 今橋理子著『江戸の花鳥画—博物学をめぐる文化とその表現』、スカイドア、1999年、12頁。

<sup>6</sup> 1790年刊の作品。喜多川歌麿(宝暦3〔1753〕年～文化3〔1806〕年)の狂歌絵本3部作の一部、他2部は『画本虫撰』、『潮干のつと』。ハルオ・シラネ著『四季の創造 日本文化と自然観の系譜』、角川選書、2020年、63頁。

<sup>7</sup> ハルオ・シラネ著『四季の創造 日本文化と自然観の系譜』、角川選書、2020年、51頁。

<sup>8</sup> 同書、32頁。

<sup>9</sup> San San May and Jana Igunma. *Buddhism Illuminated Manuscript Art from Southeast Asia*, University of Washington Press, 2018, p.122.

た<sup>10</sup>。この時期、鶴や孔雀が神の乗り物と自然風景の飾り物として両方の役目を担うようになった<sup>11</sup>。

タイの文学では、アユタヤ王朝期、「カーブヘールア船歌(Kabherua、กาพย์เห่เรือ)」<sup>12</sup>では、王室の船旅において植物、魚、鳥の姿を鑑賞する様子が歌われた。そこでは孔雀、鶴、鷗、鸚哥、雉、鸚鵡、郭公が登場し、これらは恋人の性格等に喩えられる。チャクリー王朝期になると、前時代より読まれる鳥の種類が多くなり、「クレーン紀行詩 (Nirad Muang Klaeng、นิราศเมืองแกลง)」や「プラバート紀行詩 (Nirad Phrabata、นิราศพระบาท)」<sup>13</sup>等では鶏、鳩、小禿鶴などが恋愛、寂しさ、悲しみなどに喩えられた<sup>14</sup>。

仏教の美術<sup>15</sup>に関する流れをいえば、「南派」と「北派」に分かれている<sup>16</sup>。南派は、大乘仏教の発展に影響を受けた中国と日本をさし、一方、北派は小乗仏教の発展を受けた東南アジアをさす<sup>17</sup>。南派の仏画は、本来中国の道教の思想によって、宇宙の中で動植物、人間、全ての存在が繋がっていることを重要な概念とする<sup>18</sup>。そのため、山水画や花鳥画といった自然の景観を題材として描いた画風が誕生した。一方、北派はインド仏画の伝統を守りながら、仏像、仏の歴史、仏陀の物語などの絵画が主要なテーマとして描かれてきた<sup>19</sup>。また、両派の仏画を理解する方法には、南派は象徴的なモチーフによってそれぞれの観客に解釈を任せるが、北派は決定した内容を主観的に伝えるという違いがある<sup>20</sup>。その意味では、仏教美術の目標に達する第一の教えである「悟り」に関しては、南派の方は自由度が高いとは言える。

両国（日本とタイ）で描かれた絵画では、鳥は仏教的な意味を持たされていたという共通点が見える。この共通点を通して、日本とタイの仏教の捉え方、そして大きく考えれば人間と自然の関係についての理解も読み取れるはずだが、鳥に着目する研究は希少である。そのため、本論は日本とタイの鳥の意義を分析し、仏教的意味を比較し、相違点を解明するため、当時の絵画における鳥の役割、また人間との関係を明らかにする。

<sup>10</sup> Kawit Tangcharatwong. *Variety of Stories on Mural Painting in the Reign of King Rama III*, Silpakorn University, 2019, p.14.

<sup>11</sup> Pamela York Taylor. *Beasts, Birds, and Blossoms in Thai Art*, Oxford University Press, 1994, p.85.

<sup>12</sup> 作者は、アユタヤ王朝の貴族員であるチャウファ・タマチベット(Chaofah Dharmathibet、เจ้าฟ้าธรรมมาธิเบศ, 1705~1755). *Prachum Kabherua Boriboon*, Fine Arts Department: Ministry of Culture, 1929, p.6.

<sup>13</sup> 作者は、チャクリー王朝のストーン・プー(Sunthorn Phu, 1786~1855). *Ibid*, p.22.

<sup>14</sup> *Ibid*, p.43.

<sup>15</sup> 仏教信仰に基づいた礼拝対象、またはそれら活動のための美術の総称である。仏陀や菩薩、実在・伝説上の尊者などに関する伝説を描いたものや寺院などの建築や仏具も含まれる。

<sup>16</sup> 南北を指すものではない。Titus Burckhardt. *Foundations of Oriental Art & Symbolism*, World Wisdom, 2009, p.75.

<sup>17</sup> *Ibid*.

<sup>18</sup> 中国で発展した道教から受けた思考である。 *Ibid*.

<sup>19</sup> *Ibid*, p.82.

<sup>20</sup> *Ibid*, p.79.

## 序章

まず「動植綵絵」と「ニバタ・ジャータカ」の概要を紹介する。



図1 「動植綵絵」とともに寄進された「釈迦三尊」

「動植綵絵」は、宝暦7(1757)年頃～明和3(1766)年頃に伊藤若冲<sup>21</sup>に作成された30幅の絹本着色画であり、大きさはそれぞれ約142×80cmである。臨済宗大本山相国寺(現・京都市上京区)の第113世主持の大典顕常(享保4〔1719〕年～享和1〔1801〕年)が執筆した漢詩文『小雲棲稿』には、親友だった伊藤若冲との関係について記した章「藤景和書記」があり、そこでは「動植綵絵」のそれぞれの作品の副題と内容が記述された<sup>22</sup>。この絵には鳥、昆虫、魚などが描かれ、「釈迦三尊」(図1)とともに、若冲から相国寺に寄進された<sup>23</sup>。

「動植綵絵」は、臨済禅宗を篤く信仰した若冲が、釈迦の元に集う様々な植物、鳥、昆虫、魚貝などの生き物を描いた絵画である。「釈迦三尊」の元に集っている動植物は、全てのもものが仏性を持つため、その特性を理解できると、悟りを開くことが可能である<sup>24</sup>。当時、相国寺にて年中行事の法会の折、「釈迦三尊」とともにこの絵は飾られ、一般にも公開された。「動植綵絵」の30幅のなかでは、合計17種類の鳥が登場する。現実の鳥は鶏、鶴、錦鶏(きんけい)、孔雀、鸚鵡(おうむ)、鸚哥(いんこ)、鴛鴦(おしどり)、雁(かり)、鶯(がちょう)、雀、白鶴(はくせきれい)、黒鴨(くろひよどり)、大瑠璃(おおるり)、鳩、目白、百舌鳥(もず)の16種類、そして空想の鳥は鳳凰の1種類である。

「ニバタ・ジャータカ」は、クルアワン・ワラビハラ寺の壁画に描かれた510点の壁画(図2)であり、各点が約85×85cmである。ラマ3世に命じられ、仏教を広げる教育の一環としてパーリ語の仏典を参考にして制作され、画家の名は

<sup>21</sup> 江戸中・後期の画家。本名原左衛門、名は汝鈞、若冲居士と号した。京都錦小路中魚屋町の青物問屋の長男、絵師と禅に傾倒し、40歳から画業に専念した。初め狩野派、琳派、宋・元・明の花鳥画を多く模写し、写実的描写に感嘆された。身近な動植物の描写力のある特異な形態や色彩感覚による斬新な花鳥画とくに鶏図と得意とした。代表作は「動植綵絵」の30幅(明治22(1889)年に相国寺より宮内庁に献上、現・宮内庁三の丸尚蔵館蔵〔国宝〕)、85歳で死去。

<sup>22</sup> 宮内庁三の丸尚蔵館・東京文化財研究所(編集)『伊藤若冲 動植綵絵 全三十幅』、小学館、2010年、5頁。

<sup>23</sup> 「釈迦三尊」とは釈迦・普賢・文殊像という普賢菩薩像である京都相国寺が収蔵している作品。釈迦を中尊に、薬王(文殊)、薬上(普賢)の菩薩を左右の脇侍する様式。同書。

<sup>24</sup> Yukio Lippit. *Colorful Realm: Japanese Bird-and-Flower Paintings by Ito Jakuchu*, Chicago University Press, 2012, p.155.

不明だが、複数人で描かれた<sup>25</sup>。スコータイとアユタヤ王朝期にも仏陀の前世物語が寺院で描かれたこともあるが、本寺は絵画の数が最も多い。パーリ語の仏典による物語は 547 点あるが、描く空間に限りがあるため、絵画は 510 点とされた<sup>26</sup>。



図 2 「ニバタ・ジャータカ」の壁画(部分)

「ニバタ・ジャータカ」の内容は、菩薩として仏性を得る前の神、人間、動物といった前世の物語が絵に描かれたものである。菩薩のように、危機に出合いながらも美德を集めて 547 人生を経て悟ることが可能とされ、当時の僧や市民らにその概要を会得してもらうことが主な目的である<sup>27</sup>。また、「ニバタ・ジャータカ」510 点には、主要なモチーフとして合計 17 種類の鳥が登場する。現実の鳥は機織鳥(はたおりどり)、鶉、鳩、鶏、俱伎羅(くきら)、烏、鸚哥(いんこ)、孔雀、禿鷹(はげたか)、田雲雀(たひばり)、鶉(う)、啄木鳥(きつつき)、金糸雀(きんしじゃく)、赤筑紫鴨(あかつくしがも)の 14 種類、そして空想の鳥はハムサ(Hamsa)、ガルダ(Garuda)、キンナラ(Kinnara)の 3 種類である。

以下、「動植綵絵」と「ニバタ・ジャータカ」に登場する孔雀、鶉、鸚哥、鳩などの現実の鳥を分析し、仏教から受けた影響について解明する。

## 第 1 章 孔雀

孔雀(クジャク)は、クジャク属 *Pavo* として、インドクジャク *Pavo cristatus* とマクジャク *Pavo muticus* の 2 種類がいる。インドクジャクは、インド・スリランカの標高 1500 メートル以下のあまり密生していない森林にすむ。地上で、草の種子、木の実、昆虫などをとり、ときにはヘビ類も食べる。雑食性で丈夫であり、特にインドでは飼養ともされた。全長は雄が約 2 メートル、雌は約 1 メートルである。雄の体色は光沢の青緑で円く黄色の斑紋が尾に並んでいるが、雌は斑紋がなく雄とほぼ類似した色となっている。マクジャクは、中国南西部、インドのアッサム地方、インドシナ半島、マレー半島北部、ジャワ島の森林に

<sup>25</sup> Prungsri Wanliphodom. *Literary Splendor from Nibata Jataka*, Thai Arts Department: Ministry of Culture, 2002, p.384.

<sup>26</sup> Phra Amphon Buddasarn. *The Analytical Study of the Buddhist Philosophy and Buddhist Art from the Mural Paintings of Pali Jataka at Wat Kruewan-vahavihara*, Thammasart University, 2003, p.22.

<sup>27</sup> Ibid.



すみ、生態と形態はインドクジャクとほぼ同様である<sup>28</sup>。



図3 老松孔雀図



図4 孔雀明王像

伊藤若沖の「老松孔雀図」(図3)では、深緑の老松に立った白い孔雀一羽が描かれ、周りには薄ピンク色の牡丹が見える。白い孔雀は全ての誕生、すべての始まりに先立つ無であるので、神々しさを惹起させ、霊的表現、信仰の証しとされている<sup>29</sup>。紫式部の日記では「秋の草むら、蝶、鳥などをしろかねしてつくりかかやかしたり」<sup>30</sup>とあり、平安時代に白色が潔白を表した<sup>31</sup>。

日本国宝の「孔雀明王像」(図4)では、孔雀の上に明王(四臂の菩薩形)が乗っている。明王の手には、孔雀の羽、蓮の花、具緑果、吉祥果を持った姿に描かれている。密教では、雨を祈り、もろもろの災厄を除いて安樂を得させる孔雀経法の本尊とされる<sup>32</sup>。

老松は中国から日本に伝わってきた吉祥植物として、長寿を願うモチーフとされるため、この絵では長寿を示している<sup>33</sup>。中国では、牡丹は薬として寺院に植えられ、根の皮部が漢方では鎮痛剤として虫垂炎、月経痛、腫れ物などの治療に用いられたので、ここでは痛みを消すことができるものを示している<sup>34</sup>。つまり、この絵は孔雀の神格化ということと、悪事から防護できることを示し

<sup>28</sup> ペリンズ・クリストファー・エム著『世界鳥類辞典』、同朋舎出版、1996年、121頁。

<sup>29</sup> チャバリイェ・ジェイ、ギアバント・エイ著『世界シンボル大辞典』、大修館書店、1996年、46頁。

<sup>30</sup> 村上千鶴子著「伊藤若沖という生き方—作品の分析と求道の考察—「動植綵絵」を中心に、禅宗、分析心理学の視点から」、日本橋学館大学紀要第9号、2010年、9頁。

<sup>31</sup> チャバリイェ・ジェイ、ギアバント・エイ著『世界シンボル大辞典』、大修館書店、1996年、46頁。

<sup>32</sup> 東京国立博物館、[https://www.tnm.jp/modules/r\\_collection/index.php?](https://www.tnm.jp/modules/r_collection/index.php?)、(2020年10月10日閲覧)

<sup>33</sup> Yukio Lippit. *Colorful Realm: Japanese Bird-and-Flower Paintings by Ito Jakuchu*, Chicago University Press, 2012, p.57.

<sup>34</sup> Ibid.

ている。



図5 パベルラタ・ジャータカ



図6 マハナコーン・ニバナ

「ニバナ・ジャータカ」の「パベルラタ・ジャータカ」(図5)では、金色の孔雀が一羽、台に立ち、人々に囲まれて街内にいる姿が描かれている。孔雀は身体が金色なので、仏陀の化身として表現されている<sup>35</sup>。これは菩薩が孔雀として生まれ、鳥の存在しないパウエル街で見せ物とされ、せつせと練習を受けた上で鳴き声や踊りが上手になり、観客を感動させたという逸話をもとになっている<sup>36</sup>。この絵では、孔雀の外見が美しさを表している。また、他2点の絵である「マハモラ・ジャータカ」と「モラ・ジャータカ」でも、孔雀が美しい外見のためその命を狙われるが、捕まえらるる度に王様の前で法句経を教えるという逸話を表している<sup>37</sup>。ここでは内面の美しさのおかげで孔雀が危機から脱し、生き抜くことができたという逸話が示されている。

また、「マハナコーン・ニバナ(Mahanakorn Nipana, มหานครนิพพาน)」(須弥山)(図6)では、鳴いている金色の身体の孔雀、鶴、ハムサ(空想の鳥)が合計4羽描かれることによって、孔雀は身分が高く、仏陀に近い立場の存在であることを示している<sup>38</sup>。背景には中国船が浮かぶ海と、森に近い中国風の建物の街が描かれるが、これは単純に、タイと中国との貿易が活発な時代であったラマ3世の時期の風景であることを表している<sup>39</sup>。本図の孔雀には、仏陀のように外見および内面にある美しさと知恵が喩えられている。

「動植綵絵」の孔雀は神霊であり、悪事を防護できる鳥とされるが、「ニバナ・ジャータカ」の方は、美しい姿を持ち道義を教えられる存在としての菩薩である。

<sup>35</sup> Kawit Tangcharatwong. *Variety of Stories on Mural Painting in the Reign of King Rama III*, Silpakorn University, 2019, p.33.

<sup>36</sup> Phra Amphon Buddasarn. *The Analytical Study of the Buddhist Philosophy and Buddhist Art from the Mural Paintings of Pali Jataka at Wat Kruewan-vahavihara*, Thammasart University, 2003, p.117.

<sup>37</sup> Ibid, p.176.

<sup>38</sup> San San May and Jana Igunma. *Buddhism Illuminated Manuscript Art from Southeast Asia*, University of Washington Press, 2018, p.76.

<sup>39</sup> Kawit Tangcharatwong. *Variety of Stories on Mural Painting in the Reign of King Rama III*, Silpakorn University, 2019, p.33.

## 第 2 章 鶏

鶏(ニワトリ)は、ヤケイ *Gallus gallus domesticus* 属であり、家畜化したものの総称である。ヒマラヤ地域を含むインド亜大陸と東南アジアに分布する。紀元前 2000 年ごろに家畜化され、ペルシア、ローマを経てヨーロッパに、中国、朝鮮半島および南西諸島経由の 2 つのルートを経て日本へ伝った。品種数は 112 種、卵用種、肉用種など、実用鶏と観賞鶏に分かれる。その中にある種類の軍鶏(しゃも)は、江戸初期にシャム(タイの旧国名で、シャモの名の由来となっている)から渡来したマレー系の闘鶏であるが、徳川家康の命令によって飼鳥や珍味とされた。体形は上体がほとんど直立し、とさかは三枚ある<sup>40</sup>。



図 7 南天雄鶏図



図 8 竹鶏図

伊藤若冲の「南天雄鶏図」(図 7)は、黒い軍鶏一羽が紅色の南天と白色の小菊のなかに立っている。仏教では、黒色が聖なる身体を包む袈裟の色であることから、あらゆる侮辱や迫害、誘惑などによく耐え怒らぬ「忍辱」を表現している<sup>41</sup>。雄鶏が王者のように雄々しい立ち姿で描かれており、「竹鶏図」(図 8)と同様、自画自賛によると、五更(午前四時)の時、鋭い眼でじっと未明をうかがっているため、大悟した禅僧の姿とされる<sup>42</sup>。この姿はいち早く悟りを得て真理を世に告げる仏教者を表しており、古代中国で鶏は、文・武・勇・仁・信の五つの徳をもつと言われた。これが五徳の意味である<sup>43</sup>。

また、本図の背景には植物も描かれている。それは晩秋を表現する 2 種類の植物であり、南天は「難転」に通じるとして、縁起植物として扱われ、盗人、火災、魔除けのために植えられたもの、そして菊は、初めは薬草として日本へ渡来し装飾とされた花である<sup>44</sup>。菊は平安時代以降、秋の花の代表となり、中国では正月や子孫の祝い、延命長寿の霊草とされた。そのため、南天と菊の組み合わせは、季節を表現するだけでなく、薬効をもつものであるために、治癒力を意味する。本図の鶏は、苦悩を癒し、悟りを開いた僧のことを喩えている。

<sup>40</sup> ペリンズ・クリストファー・エム著『世界鳥類辞典』、同朋舎出版、1996 年、97 頁。

<sup>41</sup> Yukio Lippit, *Colorful Realm: Japanese Bird-and-Flower Paintings by Ito Jakuchu*, Chicago University Press, 2012, p.57.

<sup>42</sup> 作者は中国僧の蘿窓(南宋時代 13 世紀)。Ibid.

<sup>43</sup> Ibid.

<sup>44</sup> Ibid.





図9 クックタ・ジャータカ



図10 プロマジャータ

「ニバタ・ジャータカ」の「クックタ・ジャータカ」(図9)では、金色の鶏1羽と1羽の普通の鶏と、空を飛んでいる鷹1羽が描かれた。金色の鶏は、仏陀の肌色を表すとされ、光を表現している<sup>45</sup>。これは菩薩が鶏として生まれ、森林に従者である鶏約百匹と棲んでいる様子を表現している。ある日、襲ってきた鷹に従者である鶏1羽ずつを食べられたが、菩薩である残りの鶏1羽は鷹に道義を教えたため、善悪を理解できた鷹が立ち去ったとされる<sup>46</sup>。他1点も同じ作名で、同様の話を表現しているが、敵対者は猫である。ここでは、鶏が善悪を教える力を持つため、困難から抜け出せたことを表している。また、「プロマジャータ(Phommachat, พรหมชาติ)」<sup>47</sup>(図10)では、鶏に乗る鬼は日曜日生まれた人を指し、気分屋だが根気のある性格を持っている。またタイの伝統干支図のなかにある鶏は、誠実、競争力のある、時間を護る、気前の良い、そして自信のある人を表象する<sup>48</sup>。こうして、本図の鶏は、善悪を教える力のあつる洒脱の人を喩えている。

このように、「動植綵絵」の鶏は、悩みを癒してくる修行中の禅僧とされるが、「ニバタ・ジャータカ」の方は、道義を教えられる能力をもった菩薩とされた。

### 第3章 鸚哥

鸚哥(インコ)は、Psittacidae属であり、オウム科の鳥のうち、中、小型で尾が長く、羽色の派手なもの総称である。南アジア、アフリカ、南アメリカなど熱帯の森林にすむ。厳密にいうと、オウム(鸚鵡)とインコは区別されにくいだが、インコは体色が赤や緑などあざやかで尾が長く、羽冠はない。人の言葉をまねるものが多く、飼鳥にされる。雄雌は一般に同色であり、声は一般に甲高く、鳴き騒ぐものがあり、社交性の強い鳥である。特に、人に単

<sup>45</sup> Kawit Tangcharatwong. *Variety of Stories on Mural Painting in the Reign of King Rama III*, Silpakorn University, 2019, p.33.

<sup>46</sup> Phra Amphon Buddasarn. *The Analytical Study of the Buddhist Philosophy and Buddhist Art from the Mural Paintings of Pali Jataka at Wat Kruewan-vahavihara*, Thammasart University, 2003, p.177.

<sup>47</sup> 19世紀に作成した絵付き折本紙写本、作者不明。The British Library, Asian and African studies blog, *The Year of the Rooster; from a Thai perspective*. <http://www.blogs.bl.uk>. (2022/10/13 Access)

<sup>48</sup> San San May and Jana Igunma. *Buddhism Illuminated Manuscript Art from Southeast Asia*, University of Washington Press, 2018, p.98.

独で飼われると、その社交性が満足されず、人の鳴き相手として人語をまねるようになる<sup>49</sup>。



図 11 老松鸚鵡図



図 12 出相阿彌陀經(部分)

伊藤若冲の「老松鸚鵡図」(図 11)では、二匹の白色の鸚鵡が正面にいますが、ここでは背面に止まっている緑の鸚哥 1 羽に注目する。その鸚哥は老松の幹に止まり、下方に白い滝が流れている。身体の色は、現実の緑色であるが、仏の使者を象徴する二羽の白い鸚鵡と対話し、鸚鵡は、仏陀の教えを鸚哥に伝えていように見える。言葉を真似る才能を持つ鸚哥はその教えを他の生き物に伝え、二次的な伝令者になると解釈できるのではないか。日本では鸚哥が異国の鳥で見せ物とされるが、中国の神話では観音菩薩の弟子であり、さらに孝行を表象する<sup>50</sup>。かつ、唐時代の楊貴妃が飼っていた白い鸚哥は、知性と人情を持つことで飼い主の特徴を見知る鳥とされる<sup>51</sup>。また、室町時代の「出相阿彌陀經」(図 12)では、極楽浄土で昼夜六時にきれいな鳴き声によって仏法を伝える色鮮やかな鳥として、白鶴、孔雀、鸚哥(鸚鵡とも)、舍利、迦陵頻伽、そして共命(ぐみょう)の鳥が描かれている<sup>52</sup>。

松は中国の歳寒三友の松竹梅、あるいはめでたい取り合わせとして、生命力、末永い繁栄を願う象徴とされる<sup>53</sup>。鸚哥は外来した鮮やかな鳥で人間の言葉を真似る才能を持つため、伝令者であるという主な意味を有する。

「ニバタ・ジャータカ」の「テサクナ・ジャータカ」(図 13)では、緑色の鸚哥は梟とインドハッカの 3 羽で止まっている。鸚哥の身体は緑で自然の色である。仏教では菩薩が鸚哥に化身し、パラナシ町のバラマタット王が演説会を行い、3 羽の鳥を呼び「王様の相応しい資格」を講演させ、3 羽の中で鸚哥が最も優れていたため、王宮の役員として任命されたという逸話が残る<sup>54</sup>。また、

<sup>49</sup> ベリンズ・クリストファー・エム著『世界鳥類辞典』、同朋舎出版、1996 年、32 頁。

<sup>50</sup> Yukio Lippit. *Colorful Realm: Japanese Bird-and-Flower Paintings by Ito Jakuchu*, Chicago University Press, 2012, p.49.

<sup>51</sup> Ibid.

<sup>52</sup> 浄土宗総本山 知恩院、<http://www.chion-in.or.jp/>、(2022 年 10 月 12 日閲覧)。

<sup>53</sup> Yukio Lippit. *Colorful Realm: Japanese Bird-and-Flower Paintings by Ito Jakuchu*, Chicago University Press, 2012, p.49.

<sup>54</sup> Phra Amphon Buddasarn. *The Analytical Study of the Buddhist Philosophy and Buddhist Art from the Mural Paintings of Pali Jataka at Wat Kruewan-vahavihara*, Thammasart University, 2003, p.215.

絵付き折本紙写本の「マハブツダグナ(Mahabuddhaguna、มหาพุทธคุณ)」<sup>55</sup>(図 14)では、鸚哥のような緑色の鳥が描かれ自然の風景を表現しているが、鳴き合う2羽であることは夫婦の調和を表象する。鸚哥は人間の言葉を真似る才能があるため伝令者を意味する。

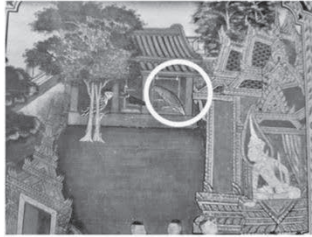


図 13 テサクナ・ジャータカ



図 14 マハブツダグナ(部分)

「動植綵絵」の鸚哥は、脇役とされているが、人の言葉を真似る力があるため、教法の伝令者とされた。同様に「ニバタ・ジャータカ」においても、鸚哥は言葉が上手なので伝令者である菩薩とされた。

#### 第 4 章 鳩

鳩(ハト)は、広義にはハト科に属する鳥の総称であるが、狭義には伝書鳩などカワラバトから飼い鳥化された各種、およびそれらが半野生化したドバトをさす。特に、Columbidae 属は、約 40 属 300 種からなり、大陸に限らず太平洋の孤島に広く分布し、鳥の中では最も繁栄している種類である。その生命力と繁殖力から、豊穰の象徴とされる。日本には鳩を八幡神の使いとする説話集『古事談』があり、鳩が場面によって幸運も不運も象徴する<sup>56</sup>。



図 15 桃花小禽図

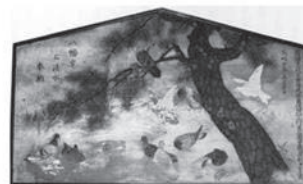


図 16 松鳩図絵馬

<sup>55</sup>The British Library, Asian and African studies blog, *Tickling the trees, dancing with the clouds: birds in Thai manuscript illustration (2)*. <http://www.blogs.bl.uk>. (2022/10/13 Access).

<sup>56</sup>ペリンズ・クリストファー・エム著『世界鳥類辞典』、同朋舎出版、1996年、32頁。

伊藤若冲の「桃花小禽図」(図 15)では、白い 3 羽の鳩が桃木の枝に止まり、上下には多瑠璃 2 羽がいる。白い動物は、神格化され神の使いであることを表現する<sup>57</sup>。「松鳩図絵馬」(図 16)では、複数の鳩が神格化され、老松とともに描かれ、八幡神の使いとされる<sup>58</sup>。八幡大菩薩に仕える鳥とも、大菩薩をあらわす御神体ともいう<sup>59</sup>。桃花は東アジアの文化では春、長寿、恋愛をあらわし<sup>60</sup>、「桃花源の記」で迷子の漁夫が流れをさかのぼると満開の桃林の國があったという逸話から、鳩はその春の國の存在の一つとされている<sup>61</sup>。そのため、鳩は神使であるという意味を示している。



図 17 ロマ・ジャータカ



図 18 ベサンダラ・ジャータカ(部分)

「ニバタ・ジャータカ」の「ロマ・ジャータカ」(図 17)では、金色の鳩が 1 羽、仙人舎の近くに止まっており、仙人と交流していることを描いた。金色である鳩は仏陀の肌の色を表現するため、仏陀を表現する。鳩に化身した菩薩が仙人の招集に従者の鳩を連れていったが、鳩を食べたがっている仙人の心を読むことができたため、早速に群を逃げ出せたという逸話がある<sup>62</sup>。他 3 点の図である「カボタカ・ジャータカ」、「ロラ・ジャータカ」、「マニ・ジャータカ」では、鳩が鳥に欲心を避けることを教えたことによって、道義を教える力を持つ鳥であることを示している<sup>63</sup>。「ベサンダラ・ジャータカ(Vessantara Jataka、เวสสันดรชาดก)」<sup>64</sup>(図 18)では、調和的な自然の風景を表すため、囀っているよう

<sup>57</sup> Yukio Lippit. *Colorful Realm: Japanese Bird-and-Flower Paintings by Ito Jakuchu*, Chicago University Press, 2012, p.73.

<sup>58</sup> 円山応挙(1733~1795)、18 世紀の作品。京都国立博物館、<https://www.kyohaku.go.jp/jp/learn/assets/home/tayori/tayori210.pdf>、(2022 年 10 月 12 日閲覧)。

<sup>59</sup> 『平家物語』巻第一よる鹿谷の「鳩は八幡大菩薩の第一の仕者なり」。日本古典文学摘集巻第一。

<sup>60</sup> Yukio Lippit. *Colorful Realm: Japanese Bird-and-Flower Paintings by Ito Jakuchu*, Chicago University Press, 2012, p.73.

<sup>61</sup> 土屋聡著「桃花源記」と「桃花源詩」と：その関係についての考察」岡山大学大学院教育学研究科研究収録 第 178 号、2021 年、23 頁。

<sup>62</sup> Phra Amphon Buddasarn. *The Analytical Study of the Buddhist Philosophy and Buddhist Art from the Mural Paintings of Pali Jataka at Wat Kruewan-vahavihara*, Thammasart University, 2003, p.155.

<sup>63</sup> Ibid.

<sup>64</sup> 18 世紀の作者不明である仏典の色彩写本である。ジャータカのなか最長のエピソードとし菩薩の最後の前世である。菩薩が欲深いボラモンに自分の子供をあげた結果、悟



な鳩2羽が、バラモンの隣に描かれている。こうして、鳩は、守護者である菩薩を示している。

このように、「動植綵絵」の鳩は、神使いとされるが、「ニバタ・ジャータカ」の方は、菩薩である守護者の鳥を表している。

## 結論

「動植綵絵」と「ニバタ・ジャータカ」に登場した孔雀、鶏、鸚哥、鳩の各鳥の身体の色や、鳥が描かれた風景、絵画の様式の仏教的な意味、という3点について、本稿の結論を述べる。

身体の色の意味について、「動植綵絵」では、白い孔雀と鳩は神仏の使いであり、黒い鶏は禅僧であり、そして緑色の鸚哥は伝令者である。各鳥はそれぞれの特徴をもち、鳥である存在を代表している。しかしながら、「ニバタ・ジャータカ」の鳥はすべて金色であり、本来の仏陀を表している。

鳥が描かれた風景に関して、「動植綵絵」では、いずれの鳥も自然界に現れ、特に薬草である植物に囲まれている。登場する植物は、それぞれ固定的でめでたい意味と、季節的な意味をもつ。一方、「ニバタ・ジャータカ」の方は、各場面に合わせるように住宅街、山々、宮殿を描いているため、人間や動物が生活する場所において、菩薩である鳥が皆を救う一場面となる。

さらに、絵画の様式では、「動植綵絵」は中国から伝わった花鳥画のジャンルとして定式化されたものでもあるが、禅宗の思想である「草木国土悉皆成仏」（すべての生命のあるものは仏性を備えている）や、釈迦の元に集う動植物という意味をもつ<sup>65</sup>。だが、「ニバタ・ジャータカ」は仏陀になるために菩薩が美德を積む前世の物語を表現するため、各場面のエピソードのクライマックスのみを取り上げて描いた。

上記3点の特徴を含めて、前述した仏教美術「南派」と「北派」の思考をもとにすれば、「動植綵絵」は自然主義的なテーマに基づいて象徴的意味合いが重視されているという点において、「南派」に該当する。一方、「ニバタ・ジャータカ」の方は、仏の物語を中心とし、文字通りの意味合いを構成するので、「北派」となる。

また、両作の共通点といえば、鳥は仏道の理解のための道具にされ、仏法である悟りを得るという概念を導く。相違点としては、「動植綵絵」は全ての存在が自発的に悟りを開く可能性を示しているが、「ニバタ・ジャータカ」は、菩薩と同様に決定的な危機と出会いながらも、美德を集められた者が悟りを開く可能性を示している。このように、両国の仏教社会を比べると、日本は鳥と人間の関係が等しいが、タイの方は鳥の方が上位の存在とされていることが見えてくる。

要するに、鳥は近世期において、日本人とタイ人にとって身近な憧れる存在であったため、仏教の世界においても比喩的な表象として用いられ、仏法において悟りへの道案内をする役割を担ってきた。

---

りを開いた。British Library: Asian and African Studies Blog. *Tickling the trees, dancing with clouds: Birds in Thai manuscript Illustration*, <http://www.blog.bl.uk/>, (2022/10/12 Access).

<sup>65</sup> 本多潤子著『いのりの四季—仏教美術の精華』、相国寺承天閣美術館、2020年、25頁。



今後の課題としては、本稿で取り上げている「動植綵絵」及び、「ニバタ・ジャータカ」に登場する空想の鳥を研究する必要がある。またそののちに、本論文で論じた結果と合わせて、近世期の日本とタイの仏教的な世界に描かれた鳥たちの意義を解明していく<sup>66</sup>。

---

<sup>66</sup> 本研究は、The Japan Foundation Bangkok 「Japanese Studies Research Fund and Workshop for Young Aspiring Scholars in Thailand」の助成金によって可能となりました。記して御礼申し上げます。

## **Birds in Early Modern Japanese and Thai Painting: A Buddhist Tool for Enlightenment**

JARIYANUSORN Jet

This research examines the symbolic meanings of four birds; peacock, chicken, parrot, and pigeon, appearing in 18<sup>th</sup> and 19<sup>th</sup> century Japanese and Thai paintings, with the aim to identify their implications in the Buddhist context of both countries. The research focuses on Itō Jakuchū (1716-1800)'s 30 painting scrolls *Colorful Realm of Living Beings* (動植綵絵), and the 510 *Nibata Jataka* (Th. นิบาตชาดก) mural paintings at Wat Kruewan-waravihara Temple (1824-1851). The method for investigation is to analyze 1) the representation of the birds (e.g. color symbolism, motif references), 2) the surrounding motifs (e.g. plants, landscape), 3) the mode of painting (e.g. bird-and-flower painting, narrative painting), to clarify the Buddhist essence incorporated in the individual birds.

The finding shows that the four birds in both works are employed as a metaphoric tool for guiding viewers to the ultimate Buddhist teaching to achieve enlightenment. However, the birds in *Colorful Realm of Living Beings* represent birds as their present being, while in *Nibata Jataka* the birds are avatars of the Buddha or Bodhisattva. These two aspects explain that in the early modern Buddhist context in Japan, the birds were placed in contemplation of equality to human, while they were perceived as the subject of superiority in Thailand.

**Keywords:** early modern bird-and-flower painting, *Colorful Realm of Living Beings*, *Nibata Jataka*